OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「きよし」と「さやけし」：（萬葉ニニニ七番「月夜清鳥」攷）
Author(s)	渋谷, 虎雄
Citation	語文. 1952, 5, p. 27-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68397
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「きよし」と「さやけし」

（萬葉二二二七番「月夜清鳥」攷）

渋谷虎雄

不念爾（おもはぬに）　四具礼乃雨者（しぐれのあめは）　零有跡（ふりたれど）　天雲霽而（あまくもはれて）　月夜清鳥（つくよきよし）

（巻十、二二二七）

この第五句「清鳥」の訓について従来二説が行はれてゐる。

（A）サヤケシ……元暦校本・代匠記・略解・古義・全釈・総釈・秀歌・全註釈、（定本・新校）

（B）キヨキヲ……元暦校本赭・類聚古集・神田本・西本願寺本・細井本・温古堂本・大矢本・京大本・寛永本・新考

そして、（B）の旧訓キヨキヲを最初にサヤケシと改訓した代匠記を見ると

……清鳥ハ人丸集ニモキヨキヲトアレハ鳥ハ音ヲ用タル歟。今按集中ニ鳥ヲ焉ニ通シテカケル歟、或ハ書生ノ失錯歟。焉ナルヘキ処ニ鳥ヲカケル事アマタアレハ、今モ焉ニテ漢ノ助語ニヤ。然ラハサヤケシナルヘシ（三巻一七〇頁）

とあり、近く鴻巣氏の全釈も

旧訓ツキヨキヨキヲとあるが、鳥は焉の草体から誤ったもので、元暦校本・類聚古集など焉になってゐるから、サヤケシと訓むべきである。

とされ、こゝに（A）の現代諸家の訓が定められてゐる。いかにも「鳥」は焉の草体焉（元）焉（類・神・西・温）に似、或はそれから誤ったものかも知れない。しかし細井本京大本などでは、はっきりと「鳥」の字になってゐるのであって、今にはかに誤字とのみはきめられまい。ましてこの誤字説に立ったサヤケシの訓はいかゞなものであらうか。（成程「焉」はヲとは訓みにくゝ、また漢文の助語とすれば訓む要もなく、のこる「清」だけならサヤケシと訓むのが、上のツクヨと七音になって落着きはするが）又何故キヨキヲではいけないのであらうか。原文のまゝに訓めばキヨキヲこそ自然とも云へる。結局この問題は、「清」をキヨシ・サヤケシのどちらに訓むのが、よりよいかにかゝることとなる。以下この問題について考へてみたい。

先づこれが解決の有力な手掛りとして採り上げられるのは、「清

島」の被修飾語「月夜」であらう。即ち、「月夜」の形容が集中どうなつてゐるか、キヨシかサヤケシかは、この場合充分傍証となり得るからである。今その全用例四十二例に就いてこれを調べてみよう。

(C)
- キヨキ・キヨミ……一〇
- ヨシ・ヨミ……六
- キヨク（テル）……二
- サヤケシ……〇

（其他テル……一二、サシ・ワタル・アリ等……一一、問題のある歌……一）

即ち、集中「月夜」の形容としては、むしろキヨキ・ヨシの類がその用例も多く自然で、サヤケシに至つては全くその例を見ないのである。このことは充分注意されてよい。

所が、同じ月にしても、これを他の場合の「月」「今夜の月」「夜わたる月」などに見ると、次の様に

(D)
- キヨミ……二
- ヨシ……一
- キヨク（テル）……二
- サヤケ（ク・サ・カリ）……三

（其他。テル……二七、敍述語なきもの……二）

となつて、「月夜」の場合とは少し趣を異にし、キヨシとサヤケシとの類が、同じ程度につかはれてゐる。すると「清島」をサヤケシと訓むことも、一概に他にその例がないとも言へず、一応は考へられてよい訓とも言へるのである。

そこで問題はもとにかへつて、結局キヨシ・サヤケシ両語の語義の検討から出直す外はない。次にそれを（D）表によつて調べてみよう。

★キヨミ・キヨクテル　四例

(1) 月よみの比可里乎伎欲美神島のいそまのうらゆ船出すわれは（巻十五、三五九九）

(2) 月よみの比可里乎伎欲美ゆふなぎにかこのこゑよびらまこぐかも（巻十五、三六二二）

(3) 月読の光者清照らせれどまどへる情（こころ）たへじとぞおもふ（巻四、六七一）

(4) 春霞たな引く今日の夕月夜不（き）飽照良武高松の野に（巻十、一八七四）

★サヤケシ　三例

(5) 春日山おして照らせる此月は妹が庭にも清有家里（さやけかりけり）（巻七、一〇七四）

(6) ももしきの大宮人のまかり出て遊ぶ今夜の月清左（さやけさ）（巻七、一〇七六）

(7) ぬば玉の夜わたる月の清者（さやけくは）よくみてましを君がすがたを（巻十二、三〇〇七）

即ち、これでみると、キヨシの方は(4)をのぞくすべて、月の「比可里」が、「清」くとある様に、(4)にしても特に光と記されてゐない丈で同様と考へてよい）いづれも月光そのもの、しかも今照り輝いてゐる月の光それ自身を対象として、客観的知覚的に形容する場合につかはれてゐる。所が、これに引き換へサヤケシの方は、初めの(5)にしても、「おして照らせる此月」と、月そのものはテルで一応表現し、それからその月が「妹が庭にも」サヤケシと、月と

月に照らし出された「妹が庭」との、全体的調和の光を己が感じを主にしてサヤケシと云ってゐることである。また(6)にしても、一見いかにも月のみがサヤケシと見られるが、さうではなく、「大宮人のまかり出て遊ぶ」その「今夜」全体――月光も、それに照らし出されて遊ぶ大宮人も――がサヤケシと己が主観から感ぜられるのである。又(7)も「夜わたる月」がよく照ってゐたらといふ丈でなく、月が照ってあたり全体がはっきりと分明であったなら「君がすがた」を「よくみてましを」といふのである。

要するにサヤケシといふ場合は、キヨシとは少し趣を異にし、キヨシの様に、今照る月光そのものゝ知覚的客観的形容といふよりむしろ、その月は勿論のこと、その月に照らし出されたものをも含めて、包括的全体的に、而も己が感じを主として情緒的主観的に形容する場合につかはれてゐることである。こゝにキヨシとサヤケシとの両者の語義について、はっきりと一線が劃されるのではなからうか。少く共「月」に関する限り斯様に考へられるのである。しかし、こゝで今一応考へて置かねばならぬことは、果してこの相異は一般的妥当性をもち得るものであるかどうか。これは単に月に関する偶発的な現象ではないだらうかといふことである。即ち今一つこの辺の省察を必要とする。

そこで次に、万葉集全体にわたって、このキヨシ・サヤケシの用例を調べてみよう。さきの月の関係をのぞいて、キヨシの例（キヨク・キヨキ・キヨミ・キヨカラをふくむ）は約六十四、サヤケシは（サヤケク・サヤケキ・サヤケサ・サヤケミ・サヤケカルをふくむ）約十九例ほどあるが、今それらを、それぞれの被修飾語――何をキヨシ又はサヤケシとしてゐるかのその素材――によって分類してみると、凡そ次の通りになる。

（E）

	キヨシ	サヤケシ
川に関するもの	三四	一五
その内（湍音	〇五	〇
その内（川音		四
海に関するもの	二二	二
其他の自然	四	一
人事に関するもの	四	一

（問題のある歌八首―五七一、九〇七、一〇三七、一一〇八、一一五九、一二三九、二〇四三、二〇四七は一応のぞく）

この表で見る様に、両者とも川に関するものが多いが、こゝで一つ注目されるのは、同じ川に関するものの内でも、聴覚に訴へられる湍音・川音を、前者はキヨシ、後者はサヤケシと、区別して形容してゐることである。即ち次がそれで

★キヨシ　五例

(8) 古へもかく聞きつつや偲びけむ此の古河の清瀬之音矣（巻七、一一一一）

(9) 暮去らずかはず鳴くなる三和河の清瀬音乎聞かくしよしも（巻十、二二二二）

(10) 八隅知し　我大王の　めし給ふ　芳野宮は　山高み　雲ぞたな引く　河遠み　湍之声曾清寸。神さびて　見れば貴く……（巻六、一〇〇五）

(11) 明つ神　吾が皇(おほきみ)の……高知らす　ふたぎの宮は　河近み　湍音(せおと)清。山近み　鳥がねとよむ……(巻六、一〇五〇)

(12) 吾が皇(おほきみ)神の命の　高知らす　ふたぎの宮は　もも樹もり　山は木高し　落ちたぎつ　湍音毛清之……(巻六、一〇五三)

★サヤケシ　四例

(13) さざれ浪磯こせぢなる能登湍河音之清左たぎつ瀬ごとに　(巻三、三一四)

(14) はねかづら今する妹をうら若みいざいざ河の音之清左(巻七、一一一二)

(15) 大王の御笠の山の常にせる細谷川の音乃清也(巻七、一一〇二)

(16) 見まくほり来しくもしるく吉野川音清左見るにともしく　(巻九、一七二四)

これで見ると、キヨシの方は「河」の一部分をなす「湍」(対象)の音の知覚的客観的形容に、一方サヤケシの方は、どこのどの部分といふことなく、川全体からの音の、已が受ける感じを主とした。情緒的主観的形容となって、即ち前者は、対象を主とした表現で、それの客観的知覚的形容に、後者は自己を主とした表現で、それの主観的情緒的形容にと、それ〴〵区別してつかはれてゐることに気附くのである。即ちこれは、さきの月の場合と考へ合せて興味ある事実と云へやう。

さて、今のは両語の聴覚に訴へられる場合であったが、次にこれが視覚に訴へられる場合(特に「見る」の詞を伴うもの)について調べてみよう。

★キヨシ　一例

(17) 住吉のおきつ白波風吹けばきよする浜を見者浄霜(巻七、一一五八)

★サヤケシ　六例

(18) 昔見し象の小河を今見れば爾清なりにけるかも(巻三、三一六)

(19) 大夫のさつ矢手ばさみ立ち向ひ射る円方は見爾清潔之(巻一、六一)

(20) 八隅知し　我大王の　めし給ふ　芳野の宮は……神さびて　見れば貴く　よろしなへ　見者清之……(巻六、一〇〇五)

(21) 大滝を過ぎて夏箕にそはりゐて浄き河瀬を見何明沙(巻九、一七三七)

(22) ……神ながら　わご大王の　うちなびく　春の初は　やちくさに　花さきにほひ　山見れば　見のともしく　河見れば　見乃佐夜気久　ものごとに　さかゆる時と……しきませる　難波の宮は……(巻廿、四三六〇)

(23) ……布勢の海に　船浮けすゑて　沖辺漕ぎ　へに漕ぎ見れば　渚には　あぢむら騒ぎ、島まには　木ぬれ花咲き　こゝばくも　見乃佐夜気吉加……(巻十七、三九九一)

この表で注意されるのは(22)と(23)で、この様な例はキヨシには全く見られないものである。これらは単に「川」丈、「なぎさ」「海」「しま」丈がサヤケシといふのではなく、(22)であれば、「川を見ると眺め、が好く」(全釈)とある様に、川を含めたあたり全体の眺めについての已が感じであるし、又(23)にしても、特別サヤケシと修飾した対象はなく、「なぎさ」「しまま」それらすべてをひっくるめて、「見ることの清けきことよ、即ち、景色のよいことよ」(全釈)なので

ある。即ち、いづれもみなあたり全体の景色についての、己が感じを主とした主観的情緒的形容の場合に限られてゐる。こゝにも亦サヤケシのキヨシと異る意義を見出すことが出来る。

終りに、念の為、さきの（E）表の内から、同じ対象を両語に形容してゐる一例、「瀬」をとって、これを比較して見よう。

★キヨシ　六例

(24) 千鳥鳴く佐保の川門の清瀬乎馬打ちわたしいつか通はむ（巻四、七一五）

(25) 清湍爾千鳥妻よび山のまに霞たつらむかむなびの里（巻七、一一二五）

(26) ……渋溪の　埼たもとほり　まつだえの　長浜過ぎて　うなひ河　伎欲吉勢其等爾　鵜河立ち　かゆきかくゆき……（巻十七、三九九一）

(27) ……新河の　その立山に　常夏に　雪降りしきて　おほせる片貝川　の伎欲吉瀬爾　朝よひごとに　立つ霧の……（巻十七、四〇〇〇）

(28) ……越と名に負へる　天ざかる　鄙にしあれば……鳥つ鳥　鵜養が伴は　行く河の　伎欲吉瀬其答爾　かがりさし　なづさひ上る……（巻十七、四〇一一）

(29) 妹に逢はず久しくなりぬ饒石河伎欲吉瀬其答爾水占はへてな（巻十七、四〇二八）

★サヤケシ　二例

(30) 今日もかも明日香の川の夕さらずかはづなく瀬の清有良武（巻三、三五六）

(31) 泊瀬川しらゆふ花におちたぎつ瀬清跡見にこしわれを（巻七、一一〇七）

これも、キヨシの方は、全景「川」の一部分をなす「瀬」を対象として、それの客観的知覚的形容に、一方サヤケシは、同じ川の瀬にしても、今一つの要素「かはづなく」「おちたぎつ」ものが加って、それらを包括して、むしろ己が感じを主とした主観的情緒的の形容となってゐることに気附く。即ちこれまでの考察のほゞ誤りないことを知るのである。

以上を要するに、キヨシとサヤケシとは、一見同じ意をもって使はれてゐる様であるが、実は斯様にはっきりと区別され得る意をもって使はれてゐること、即ちはじめ月に関して見た両語の相異は、只単に月のみに止まらず、既に語自体がもつ本性的意義の相異する部面に根ざして、広く行はれてゐたものではないかといふことである。さればこそ次の様な歌も見られる訳であらう。

(32) 大滝を過ぎて夏箕にそはり居て浄き河瀬を見るが明さ（巻九、一七三七）

(33) ……神風の　伊勢の国は……河見れば　左夜気久清之　水門なす　海も広し……（巻十三、三二三四）

尚、このことは万葉以外の他の上代文献について見ても同様で、（記紀、風土記、宣命など、キヨシ十九例、サヤケシ三例を見る）次のサヤケシの例に見ても、特に(35)など、思ひ半ばに過ぎるものがあらう。

(34) 丈夫のさつ矢たばさみ向ひ立ち射るや的方浜の佐夜気佐（伊勢国逸文風土記）

(35) 佐山の郷。　同じ天皇行幸し給ひし時、この山の行宮に在し

て、徘徊(たもとほ)りて宣ひ給ひしく、「望二四方一分明」因曰二分明村一。分明謂二佐夜気一……（肥前国風土記）

(36) ふちもせも伎与久佐夜景志はかたがは千年をまちて澄める河かも（続日本紀）

さて、以上の様に考へて、この主題の歌に対する時、果してそのどちらの訓がより妥当であらうか。今この解を鴻巣氏の全釈についてみるに

意外ニモ突然時雨ノ雨ハ降ツタケレドモ、今ハ空ノ雲ガ晴レテ、月ノ光ガ明ラカニ照ツテヰル。ヨイ月ダ。

とある。また秀歌は「月明となった」、全註釈は「月が明らかだ」と解されてゐる。即ち、この場合の「月夜」は「月光」「月」を直接指示してゐることに間違ひはない。而も「時雨は降ったけれ共、まうその雲もはれてあの月が」と、結局はじめ四句は、第五句を言ひ出す為にあるといっても過言ではない。即ち、こゝはすべて今輝いてゐる月そのものを直接さし示してのものであって、決してあたり全体の景色を歌ってゐるのではない。こんな場合、月光とそれに照らし出されるものとの、調和的全体的な形容の詞サヤケシでよいであらうか。まして「月夜」を形容してキヨシこそは十例も数へられるのに、サヤケシに至っては他にその例を見ないのである。しかもその訓は「烏」が「焉」の誤字といふ前提に立ってのものであるが、左様な「焉」に形容詞のかぶせられた例も、集中には見当らないのである。たゞ一つ

(37) 秋萩の散りすぎ去かばさを鹿はわび鳴きせむな不見者乏焉(みずはともしみ)（巻十、二一五二）

があるが、これは既に形容詞から動詞化されたものに伴はれた例で、この場合とは少し趣を異にしてゐる。

翻って、キヨキヲの場合、このヲは何かといふ問題が残るが、これは活用言の連体形につゞいて接続助詞の形をとってゐると見られる。集中他にも次の様な例が見えてゐる。

(38) 児等が家道差間遠烏(やまとほきを)ぬば玉の夜渡る月にきそひあへむかも（巻三、三〇二）

(39) 荒磯こす浪をかしこみ淡路島見ずや過ぎなむ幾許近(ここだちかきを)乎（巻七、一一八〇）

(40) 大方は何かも恋ひむ言挙せず妹に依りねむ年者近綾(としはちかきを)（巻十二、二九一八）

勿論、当時のヲは殆んどがさうであった様に、これも間投助詞的な意をも含んでゐることは言ふまでもない。（昭和十七年六月短歌研究折口博士所論参照）

尚また、これによって解すれば、この一首は意外にも、時雨が降ったけれど、今はもう雲もなくはれて、こんなよい月になったよ。（それを、なぜまああんなに気をもんだのだらう）ともならうか。よりこの方が作者の感動も云ひ現はされ、歌の生命も生きてくるのではないだらうか。

以上の様に考へて、この訓は矢張、キヨキヲとする旧訓の自然なのに従ふべきものと思ふのである。（二六、五、一〇）

—大阪学芸大学助教授—